

『今昔物語集』天狗説話の仏教性

——卷二十第十一「竜王為天狗被取語」考——

嶋 中 佳 輝

はじめに

『今昔物語集』^①は平安時代の院政期に成立した仏教説話集である。『今昔』には編纂意図を著す序文や跋文が存在しないため、編者による編纂の意図と目的は直接的には示されていない。しかしながら『今昔』は構成や表現の観点から、雑纂ではなく緊密な編纂意識の存在が想定できる。

さて、『今昔』には「天狗説話」と言われる説話群が存在する。^②

天狗が出現する説話が説話群のまとまりを持つ一部分に集中して存在する説話集は『今昔』のみであり、「天狗説話」の存在は『今昔』が仏教説話集として成り立つ上で編纂意図や説話集としての性格の解明に大きな示唆を与えている。この「天狗説話」が『今昔』本朝仏法部である卷二十に存在することについては、森正人氏に明瞭か

つ詳細な考察がある。

本朝篇仏法部が、日本の仏教に関する一切の事象を体系的に記述しようとしたのであれば、ここに、反仏法的存在をも仏法の秩序のうちに組みこみ、仏法の論理によって統御しようとする関係が見出されないのであろうか。天狗は反仏法的存在には違いないが、仏法の体系の外にあるのではない。周縁の存在であり異端であることにおいて、仏や法や僧の中心性や正統性を支えているのである。天狗説話群が仏法部の組織上に与えられた位置は、天狗の周縁的異端的性格とまさしく対応している。こうして反仏法的存在を仏法の論理をもって統御する営為を通して、逆に仏法の正統性が確認されていくであろう。^③

本論はこの理解に従い、まず「天狗説話」を反仏法的存在の説話であると定義づけたい。ただし、そうであるならばどのように「天

狗説話」が反仏法的存在である天狗を語る説話群であり、仏法部に位置づけられる仏教説話として成り立っているのが問題であると見える。この問題を調べるために本論では、天狗説話の一つである卷二十第十一「竜王为天狗被取語」^④を取り上げる。卷二十第十一は次のような説話である。^⑤

昔、讃岐国に弘法大師がその国の民のために築いた、万能池という池があった。この池は广大で竜の住処ともなっていた。あるときその池の竜が日光浴のために「小蛇」の姿で池から出ると、近江国比良山の天狗が変じた「鶏」にさらわれてしまった。竜は強いとはいえ、思いがけないことに何もできず、天狗に食べられることは免れたものの比良山の洞窟に幽閉され、水がないので飛ぶことができず、死を待つばかりの状態で四、五日がたった。

この間、天狗は比叡山の僧をさらおうと思い、北谷で水瓶を持っていた僧をまんまとさらって、竜と同じく洞窟に閉じ込めた。竜が一滴でも水があれば力を発揮できると訴えると、僧は持っていた水瓶に残る一滴の水を与えた。竜は力を取り戻し「小童ノ形」となって僧を背負い比叡山まで届けた。坊の人々は僧の話聞き驚いた。その後、竜は京で「荒法師」の姿になっていた天狗を見つけ出し、蹴り殺した。天狗は翼の折れた

「屎鶏」となり踏まれた。

竜が僧の徳により命を長らえ、僧は竜の力で山に帰った。

「前生ノ機縁」と言うべきであろう。

この話はさらわれた僧が語ったことを語り継いで伝えたものである。

さて、本話は諸注釈書によって出典未詳とされ、同話・類話の類としても後代の室町時代に成立の『秋夜長物語』が指摘されるに留まる。^⑥ただ、『秋夜長物語』は稚児物語であり、本話との類似性は「天狗が僧をさらひ幽閉する」といった話柄の共通性にすぎない。つまり、諸注釈書において類話と指摘される『秋夜長物語』との比較によって本話を仏教説話として分析できるかどうかは甚だ疑問である。

そのように考えると、この説話は「天狗説話」の中で独自に生み出された説話であるのみならず、さらに『今昔』全体においても独自の説話ではないだろうか。なぜならば、僧が登場するものの天狗を倒す主体は竜という、僧とは別の存在だからである。他の天狗説話では仏法が天狗を撃退する構成をとるのが一般的であろうのに対して、本話はそのような枠組みから外れているように見えるからである。すなわち、本話を『今昔』がどのように取り入れているのかを探ることは、『今昔』の編纂意図にかかわる重大な問題であると考

えられる。

第一章 本話の天狗説話の中の位置

『今昔』の構成論としては、国東文麿氏によって指摘された「二話一類様式」が著名である。

本集の中で、相並んで存在する二説話の間には、その他の説話に比して一段と濃い類似的近縁的性格が見出されるが、それは、この二話のおおのの説話中の事件とか、人物・事物・場所などが非常に似通っているからであって、逆にいえば、その二説話はこれらを連想契機として、一括して置かれたものといえる。そして巻初より順次に二話ずつが、ある特定の類聚意識（後述）によって集められた説話群の中で、このように配列されているのであるが、またその一括された二話と次の二話の間にも、何らかの連想契機がはたらいている。しかもそれは、二話を一括している契機に比して連想性が稀薄であり部分的形式的である。だから、全話が同じような連想的転回をしているとは見られず、強い連想契機によって二話が緊密に一括され、それがさらに些少の契機を求めて次の二話に結びついてゆく、つまり二話ずつが連鎖的に展開しているのである。この二話一類様式が本集説話展開に全面的に指摘しうる典型的様式である。^⑦

『今昔物語集』天狗説話の仏教性

国東氏はさらに天狗説話に対しても二話一類を指摘している。その見解によって国東氏の考察から天狗説話に関わる部分を抽出すると、本話の二話一類をなす「連想契機」は次のようになる。^⑧

11 天狗、僧をさらひ、比良山に飛び行き洞窟にとじこめるが、僧は竜に助けられて自坊に帰る。

12 天狗、僧をだまし、弥陀の迎えと思わせて連れて飛び去り、山中の木の上に縛りつけるが、僧たちに助けられて自坊に帰る。

これによれば、国東氏は両説話の共通点を「天狗が僧を誘拐して拘束するが、助けられる」と見ていることが推測される。

ところで私見によれば、本話を構成する事項を抽出すると、

「万能ノ池」の竜が、小蛇と化しているところを鵝と化した比良山の天狗に洩われる。

比良山の天狗が、水がめを持っていた比叡山の僧を洩う。

僧は、幽閉された洞窟に竜に見つけ、水を与える。

竜は力を取り戻し、「小童」に変じて僧を背負って脱出し比叡山に送り届ける。

竜は、京で「荒法師」となっていた天狗を蹴り殺し、天狗は屎鵝となってしまふ。

である。ここで国東氏の「二話一類様式」の理解に従って、本話の

次に位置する巻二十第十二「伊吹山三修禪師得天宮迎語」⁹⁾を参照することにする。この説話を構成する事項を抽出すると、

伊吹山に三修という念仏者がおり、阿弥陀仏来迎の予告を受けた。
指定された日時に阿弥陀来迎があり、聖人を迎えて去って行った。

その後下僧が奥の山に入ると木の上に縛り付けられている聖人を発見し連れ帰った。

聖人は発狂しており数日後に亡くなった。
「智慧」がないためにこうして天狗に騙されてしまうのだ。

である。こうして見ると、両話の事項から共通する話型は見出しがたく思えるが、天狗の行動に着目すれば、確かに「天狗が僧をさらい拘束する」という点は国東氏のいう重要な「連想契機」であると首肯できる。

ただし、「助けられる」という点については、巻二十第十二では聖人は死に「智慧」がないことが責められているため、肯定的な意味を与えることはできないだろう。両話を結びつける点は、天狗が僧をさらうという反仏教的行動にある。さらにこの反仏教的行動への対処で結末に明暗を分けている。

このような隣り合う二話に同じ反仏教的行動と異なる結末を持た

せる傾向は他の天狗説話でも指摘できる。例えば、

第一…仏道を妨害するため、日本に外国の天狗が飛来する↓天

狗は改心し生まれ変わって僧となる

第二…仏道を妨害するため、日本に外国の天狗が飛来する↓天

狗は打倒され、改心しない

第九…天狗の外術が人を引き付ける↓刀で外術を打倒する

第十…天狗の外術が人を引き付ける↓三宝に違えて外術を習得する

などである。

そこで改めて、天狗説話群について並びあう二話を意識すること
で、話中の反仏法的行動の種類に共通性が見えてくる。

第一…第二…外国の天狗が仏道を妨害しようとする

第三…第四…天狗が仏道を騙る

第五…第六…女性と化した天狗が僧を攻撃する

第七…第八…(第八が欠話であるため不明)

第九…第十…天狗の外術が行われる

第十一…第十二…天狗が僧をさらう

このように天狗説話の並び合う二話は天狗の反仏法的行動の種類
によって括られており、さらにその反仏法的行動への対処方法の違
いによって異なる説話として成立している傾向があることが理解さ

れよう。よって、本話は『今昔』の編纂意図として「天狗が僧をさらう」ことを取り上げつつ、天狗に打ち勝つ説話として位置付けられていると理解できる。

ただし、他の天狗説話が天狗を打倒する方法として主に加持祈禱を用いているのに対して、本話の僧は験力を發揮することがない。

天狗は直接的には竜によつて打倒され、それは結語において「前生ノ機縁」として総括される。すなわち竜の性格と「機縁」が本話を天狗説話として規定する表現であると考えられる。この問題については、以下の章節で考察していきたい。

第二章 『今昔物語集』における竜の性格

第一節 『今昔物語集』の竜説話

『今昔』における「竜」という語は天竺部に十六例、震旦部に五例、本朝仏法部に七例、本朝世俗部に一例の用例がある。天竺部から順に見ていくことで、「竜」の性格を把握したい。

天竺部で竜が現れる説話の標題と簡単な内容を以下に記した。

- 卷一 釈迦如来人界生給語第二…竜王、天竜八部が釈迦の誕生を寿いだ。

- 卷一 天魔擬妨菩薩成道語第六…天竜八部が釈迦を讃えた。また、「天魔」が仏道成就を妨害するのに「怖シキ形」として

『今昔物語集』天狗説話の仏教性

「竜頭」を用いた。

- 卷二 仏拝卒堵波給語第四…王妃が「竜神」に子供が出来ることを願った。

- 卷二 婆羅奈国大臣願子語第二十五…王が大臣の子を「天竜カ鬼神カ」と尋ねた。

- 卷三 新竜伏本竜語第七…山頂の池に住む竜が食事を受けるのに嫉妬した小沙弥は自ら悪竜となつて竜を抹殺した、そのため天候が混乱し、大王は仏舍利の力で竜を婆羅門に戻した。

- 卷三 瞿婆羅竜語第八…王に叱責された牛飼は怨みの心を起こして竜と化し、常に水が絶えない洞穴に籠つて、国と王を滅ぼそうと企んだ。釈迦はこの竜を諭して、護法の竜となした。

- 卷三 竜子免金翅鳥難第九…竜王は海底に住処とし、金翅鳥を天敵としていた。竜王は仏からもらった袈裟で我が子を隠すことで金翅鳥の難を逃れた。

- 卷三 釈種成竜王髻語第十一…戦争に敗れ追放された釈迦一族の一人はある池に住む竜の娘と結婚し、竜王の竜宮で暮らした。釈迦一族の男は後に地上に戻り、竜女を后としたが、竜女の蛇性は絶えなかった。

- 卷三 仏入涅槃給語入棺語第三十一…天竜八部も釈迦の入滅を悲しんだ。

- ・卷三茶毘仏御身語第三十四…仏が自分で付けた茶毘の炎は竜王の「七宝ノ瓶」の「無量ノ香水」でも消し得なかつた。
- ・卷四阿育王殺后立八万四千塔語第三…阿育王は竜宮にある仏舍利を望んで、鉄網で海底の竜を引き上げることで竜王に圧力をかけようとした。竜王は怖れて仏舍利を譲つた。
- ・卷四天竺人於海中值惡竜人依比丘教免害語第十三…暴風を起しし商船を沈めようとした竜は逆に舵取りに説得されて天上世界への転生を得た。
- ・卷四天竺国王服乳成瞋擬殺耆婆語第三十一…眠り病に苦しむ王は母后が大蛇に犯された夢を見て生んだ「竜ノ子」であつた。
- ・卷五一角仙人被負女人従山来王城語第四…雨に怒つた一角仙人は雨を降らす竜王を水瓶に閉じ込めてしまつた。王は五百人の美女で仙人を誘惑して験力を失わせ竜を解放へと導いた。
- ・卷五天竺国王美菓人与美菓語第十六…池のほとりにあつた美菓は竜王の食物であつたが、竜王は仏法を聞くことを条件に王への献上を承知した。
- ・卷五身色九色鹿住山出河辺助人語第十八…川に溺れた男は「山神・樹神・諸天・竜神」に助けを求め、鹿（釈迦の前世）に助けられた。

以上の例によると、天竺部の「竜」は「諸天」に並び称される「天竜八部」であることが中心となつてゐることがわかる。この「天竜八部」のように仏教の世界観の一部として存在する「竜」を「本来的に仏教世界に属する竜」と呼び、これが『今昔』における「竜」の中心に位置すると見なしたい。

一方で「竜」には蛇身という性格があり、これは卷三第七や卷三第八、卷三第十一、卷四第十三によると仏教において悪果と見なされてゐることもわかる。「本来的に仏教世界に属する竜」であるかを問わず、竜には水や嵐と深く関わる性質がある。

次に、震旦部に現れる「竜」の用例と性格は次の通りである。

- ・卷六玄奘三蔵天竺伝法帰来語第六…玄奘は帰路の信度河（イ ندラス川）上で船が大きく傾き、竜王が変じた翁が現れて戒日王から賜つた不思議な鍋（中に食べ物を入れると病気になる）を欲したため、鍋を河に投げ入れて事なきを得た。
- ・卷十秦始皇在咸陽宮政世語第一…始皇帝の馬は「竜ノ体」であつた。
- ・卷十漢高祖未在帝王時語第二…漢の高祖の父親は竜王で、高祖が始皇帝に殺されそうになつた際、樹上に隠れた高祖を守護した。
- ・卷十高祖罰項羽始漢代為帝王語第三…高祖が白い蛇を殺すと、

「赤い竜の子（高祖）が白い竜の子（項羽）を殺した」と言われた。

・卷十於海中二竜戦漁師射殺一竜得玉語第三十八…海中に青竜と赤竜が戦い、青竜が二度敗れたのを見た獵師は矢で赤竜を射て青竜の勝利に貢献した。獵師は青竜から玉をもらい、その後裕福となった。

以上の例によると、震旦部の「竜」は皇帝の象徴としての性格が強い。『今昔』震旦部は、震旦における「本来的に仏教世界に属する竜」の存在を描いていないのである。

・卷十一弘法大師渡宋伝真言教帰来語第九…唐の都で弘法大師はボロを着た童子と水の上に文字を書き合った。童子が「龍」の右上の点を除いて書くと、その文字は水の上に流れず残り続けた。右上の一点を付けると文字は竜王となって天に昇った。童子は文殊の化身であった。

・卷十一聖武天皇始造元興寺語第十五…天竺から弥勒像を盗み出した新羅の宰相は帰路の船中、暴風雨に会い、像の眉間の珠を海中に投げ入れると竜王が珠を掴んだ。宰相は珠を取り戻すために金剛般若経を書写し、この功德で竜を蛇道の苦しみから救い、珠を返してもらったが、珠の光だけは失われたままであった。

・卷十三竜聞法花説誦依持者語降雨死語第三十三…龍苑寺の僧の法華経の講読を、人の形となって毎日聞きに来る竜は旱魃を救うため自分の身を犠牲にして雨を降らせた。僧は竜を丁寧に供養し、その遺言に沿って寺を建立した。

・卷十四弘法大師修請雨経法降雨語第四十一…弘法大師が神楽苑で雨乞いを行っている時、五尺の蛇が現れて池に入っていた。大師はこれを天竺阿耨達智池の善如竜王であると言った。やがて雨雲が現れて、雨が降った。

・卷十六仕観音人行竜宮得富語第十五…観音信仰者の侍は捕えられた小蛇を助け、池のほとりに放してやった。するとその岐路にある娘が現れ、池の中の竜宮に侍を導いた。侍は娘の父親の竜王からもてなしを受け、使っても減らない黄金の餅を得て家に帰り、富裕を得た。

・卷十九於鎮西武蔵寺翁出家語第十二…道祖神の祠で、鬼神たちが「明日武蔵国で新しい仏が生まれるので、梵天、帝釈天、四天王、竜神八部が集っている」と噂した。

・卷二十竜王为天狗被取語第十一…本話
本朝仏法部における「竜」は雨を降らせる神格としての性格が強い。卷十九第十二では「竜神八部」の用例があり、卷十一第九では童子が書いた文字が竜王と化すが、この説話の舞台は震旦であり本

朝に生息する「竜」には「本来的に仏教世界に属する竜」はいない。ただし、卷十三第三十三や卷十四第四十一のように、僧の働きかけに応じて自らの力を發揮し、恵みを与えていることは見逃せない。また、卷十三第三十三や卷十六第十五のように人間と相對する際に人間の姿を取ることがあるのも特徴である。本朝仏法部の中では仏教世界の一部をなす神格と言うよりも仏教と共存し、協力する神格という面が強い。

本朝世俗部における「竜」の例は一話のみで以下の通りである。

- 卷第二十四忠明治値電者語第十一…使いに出了滝口の侍が重病にかかったため、医師忠明は灰の中に埋めるよう指示した。
- 蘇生した侍は夕立の中で金色の手を見たのち前後不覚に陥つたと語り、忠明はそれを竜の体を見たのだと解した。

本朝世俗部でのこの用例は、夕立の中の黄金の手が竜であると、話中の「忠明」が解しているにすぎず、竜そのものが出現していると思し得ない。夕立という雨から竜が想起されていることは、これまでの竜の性格に通じるが、竜は本朝世俗部には出現しない存在と見なしても良いように思われる。

以上、簡単に見てきたが、天竺・震旦・本朝それぞれの部立てにおいて「竜」の性格には異同と変化があることがわかった。天竺には「本来的に仏教世界に属する竜」、震旦には皇帝の象徴としての

竜、本朝には在地神格でありながら仏教に帰依する竜が存在し、それぞれの地域によって有様が異なる。一方でどの竜も水中に生息し、雨を降らせる性質を持つのは共通している。本話の竜も基本的には本朝仏法部における竜と共通する性格を持ち、仏教に恵みを与える在地神格として造型されている。

第二節 本話の竜の特徴における仏教性

本話に登場する竜は、竜としては仏教に帰依する在地神格と言える。その上でさらに本話の竜の特徴を次に挙げると次のようである。

- 「万能ノ池」を住処としていること
- 小蛇の姿となること
- 水を能力の源としていること
- 小童の形を取ること

そこで、これらの特徴を以下に考察していくことにしたい。

「万能ノ池」は本話の中に「其池ハ、弘法大師ノ、其ノ国ノ衆生ヲ哀ツレカ為ニ築給ヘル池也。池ノ巡リ遙ニ広シテ、堤ヲ高築キ巡シタリ。池ナドハ、不見ズシテ、海トゾ見エケリ。池ノ内底中無ク深ケレバ、大小ノ魚共量無シ、亦竜ノ栖トシテゾ有ケル」と表現されている。

「万能ノ池」は満濃池のことであり、卷三十一第二十二「讃岐国

満農池類国司語」にも「満農ノ池」として説話の舞台として登場するが、卷三十一第二十二中にも「高野ノ大師ノ、其ノ国ノ人ヲ哀バムガ為ニ、人ヲ催テ築給ヘル池也。池ノ廻リ遙ニ遠クテ堤高カリケレバ、更ニ池トハ不思エデ、海ナド、ゾ見ケル。広サハ彼方幽ナル程ナレバ、思ヒ可遣シ」という表現が見え、本話と修飾辞がほぼ同じことがわかる。満濃池に対する定型表現の存在を窺わせる。池ではなく海にも見えるほど巨大という点は竜が住処とするのにふさわしさを持たせる表現と考えられる。

一方で、弘法大師が築いたことが明記されているのは、卷三十一第二十二が国司の欲心によつて池が壊れたことを、話末に「然ル止事無キ権者ノ人ヲ哀バムト築給ヘル池ヲ失タラムダニ、量無キ罪也」としたように仏教的成果であることを強調する記事と見なせる。『今昔』に弘法大師が登場する説話は多くないが、¹⁰前述した卷第十四四十一にも弘法大師が雨乞いの末に竜王である蛇が現れ、雨が降つたという例があり、直接の関係ではないが、本話の竜には仏教性の強い土地が背景として与えられていることが確認できるだろう。

小蛇の姿を取ること、蛇が持つ悪果などの仏教的な負の印象に由来すると言うよりも、卷第十四四十一や卷十六第十五の事例のように神格としての一形態であることを『今昔』が重視したゆえの表現と見られる。¹¹

『今昔』での竜が、水中に生息するなど水に深く関わる存在であることは、すでに見た通りである。ただし、水がなければ竜としての力を発揮できないのは、そもそも他の竜に水が絶たれるということがあまり起こり得ないのもあり、本話に特有の現象とも言い得る。

これにもっとも近い事例は卷五一角仙人被負女人従山来王城語第四である。ここでは一角仙人によつて竜王が水瓶に閉じ込められ「狭ク破無クテ動キモ不為又ニ極テ佗シケレドモ、聖人ノ極テ貴キ威力ニ依テ可為キ方無シ」となる。本話では「狭キ洞ノ可動クモ非又所ニ打籠置ツレバ、竜狭ク□破無クシテ居タリ。一滝ノ水モ無バ、空モ翔ル事モ無シ」とあり表現に通じるところがある。

「小童」については、他の「天狗説話」、例えば卷二十第二では「童部」が、あるいは卷二十第三では「小童部」が天狗を直接打ちのめす存在として現れていることを受けた表現であると思われる。天狗は加持祈祷や「智慧」によつて打倒されることがあるが、天狗を物理的に打倒するのは「童」の役割なのであり、本話の「小童」もこれを受けた表現であると言えよう。

以上より、本話の竜の特徴は、いずれも『今昔』の他の説話と対照可能な表現が用いられている点にある。本話の竜にまつわる表現は『今昔』が、本話を「天狗説話」とするために整えた表現であると言えるだろう。本話の竜は本来的に仏教世界に属する竜ではない

性格であるが、表現によって仏教世界と関係する存在であることを示している。

第三章 前生ノ機縁

以上の章段で『今昔』における「竜」と本話における竜の性格を明らかにした。すなわち、本話の竜は「本来的に仏教世界に属する竜」とは認められないが、仏教性によって彩られている。『今昔』は本来的に仏教世界に属していない「竜」を、天狗を倒す主体に仕立てるにあたり、表現に仏教性を持たせていると言い得る。

一方で、そもそも天狗は反仏教存在であり、構成から見ると本話は天狗が僧をさらうという反仏教行為を語るのに主眼があるのであって、僧と実際に天狗を打ち倒す竜との関係性もまた本話が「天狗説話」たるにあたって重要な要素である。この関係性を示すのが本話の末尾に言う「竜ハ僧ノ徳ニ依テ命ヲ存シ、僧ハ竜ノ力ニ依テ山ニ返ル。此モ皆前生ノ機縁ナルベシ」という一文である。ここには僧と「竜」の互恵的關係性が「前生ノ機縁」であると評価されている。

『今昔』における「機縁」は本朝部にのみ現れる語彙で、仏法部に一〇例、世俗部に四例が見られる。元々は仏教語であるが、仏教説話集である『今昔』においてそれほど多用される語彙ではない。

用例とその中での意味を並べると次のようになる。

- 1 其ノ後、深ク前生ノ宿業ヲ恥テ、其ノ所ヲ出デ、機縁有ル所ヲ尋テ跡ヲ留メテ、日夜ニ法花経ヲ誦シテ、六根ノ罪障ヲ懺悔ス。(卷十四第二十二)…前世に犬であったことを知った永慶聖人は「ゆかり」のある土地を探した。
- 2 聖人機縁深ク在マシテ、今此ノ家ニ来リ宿リ給。(卷十五第三十)…肉食を行う薬延が法華経の功德によって往生する場に居合わせた「ゆかり」を言う。
- 3 我レ祖子ノ機縁深クシテ、来リ値テ念仏ヲ勸メテ、道心ヲ発シテ念仏ヲ唱ヘテ失セ給ヒヌレバ、往生ハ疑ヒ無シ。(卷十五第三十九)…親子の縁が尼君の往生へと導いたことをいう。
- 4 必ズ極楽ニ可往生キ機縁有ケリ」ト云テ、(卷十五第五十二)…若いころの経験が往生へと導いたことを言う。
- 5 妻ノ常ニ云ヒツル様ニ、機縁ノ不御ザリケル也」ト哀レニ思テ、(卷十六第二十九)…前世の果報が存在したことを言う。
- 6 然バ、出家皆機縁有ル事也。(卷十九第一)…結語の一部で出家の根本を説く。
- 7 此レモ機縁ニ依テ出家シテ此ク他国ニテモ被貴ル、也ケリト語り伝ヘタルトヤ。(卷十九第二)…結語の一部で出家の根本を説く。
- 8 此レヲ思フニ、出家ハ皆機縁有ル事トハ云ヒ乍、子ノ源賢ガ心

ハ極テ難有ク貴シ。(卷十九第四)…結語の一部で出家の根本を説く。

9 出家ハ、于今始ヌ機縁有ル事也。(卷十九第五)…結語の一部で出家の根本を説く。

10 此モ皆前生ノ機縁ナルベシ。(卷二十第十一 当該話)

11 家主ニ、此ク機縁深クシテ、行キ合ヘル事ヲ悲ムデ、惜ム事無クシテ許シテケリ。(卷二十六第二)…一度は離れた親子が再会した不思議さを説く。

12 此ヲ思フニ、前生ノ機縁有テコソハ、其七人ノ者共、其島ニ行住、其孫于今其島有ラン。(卷二十六第九)…無人島に流されつつもそこで自足した不思議さを説く。

13 是モ前世ノ機縁有事ニコソハ有ラメトナン語り伝ヘタルト也。(卷二十六第十三)…思いがけず財産を得た不思議さを説く。

14 其ノ後、鞍馬山ト云フ所ニ深く籠居テ、艶ズ行ヒケルニ、前生ノ機縁ヤ深カリケム、常ニ彼ノ病者ノ有様ノ思ヒ被出テ、心ニ懸リ恋シク思エケレバ、(卷三十第三)…僧と恋に落ちた不思議さを説く。

このように見ると「機縁」は卷ごとによって、用法に特徴がある。すなわち「機縁」は、靈験を説く卷十五、卷十六では往生への導きを説明する言葉として、また卷十九の出家説話の結語では出家へ

の導きの言葉として、また世俗部にありながら「宿報」を卷名とする卷二十六では不思議さを説明する言葉として使われている。共通するのは、因果関係を具体的に説明できない現象に対して仏教的な因果応報が成り立つという示唆を与える機能である。「前生ノ機縁」という語彙も、具体的な前世の記述を担保する表現というよりは、この機能に応じた慣用的な使用方法である。卷十九までの用例は、往生や出家など仏教的な世界への転身を評価する言葉として使われているため、卷二十に属する本話での用例もこれと類似するものであると言えるだろう。

本話の「竜」は「本来的に仏教世界に属する竜」ではないが、僧と接点を持ち結果的に僧を助けた、すなわち仏教に恩恵を与えた存在である。「前生ノ機縁」は『今昔』において、「竜」の非仏教性と説話の中の親仏教性の溝を埋めるに当たって有効な修辭と考えられたがゆえに、表現として用いられたと解釈できる。本話の「機縁」が持つ機能とは「竜」が僧を助け、助けられた不思議さを、仏教性を持つ修辭によって説明しようというものであった。ここに本話が「竜」を『今昔』が形作る仏教世界の法則に包み込もうとした試みが窺える。

おわりに 『今昔物語集』における本話の意義

以上、本話について構成と表現の視点から『今昔』が本話を『今昔』『天狗説話』とするにあたって、どのような改変を加えているか考察を重ねてきた。

構成から見ると、「天狗説話」は天狗の反仏教的行為について二話一括の様式にもとづいて表現が整えられて配置され、本話は続く巻二十第十二と並びあう関係に置かれていたと見なせる。すなわち、本話は構成上「天狗が僧をさらう」話であり、天狗に対して打ち勝つ説話である。

そのとき、そもそも『今昔』にとつて竜とはどのようなものであるのか、用例を見直すことで考察の手掛かりとした。この検討によれば、天竺部の竜は、単なる自然界の動物ではなく、「本来的に仏教世界に属する竜」が中心的存在であることが明らかになった。

一方で、震旦部や本朝部には在地神格としての竜が存在し、竜としての共通の特徴を持つものの、天竺部に存在した「本来的に仏教世界に属する竜」とは異なる性格を持つ。本話における竜も本朝の神格であり、本来的には仏教的な存在ではないものとして造型されていると言えるだろう。

本話では、本来仏教的性格が希薄な竜を、僧を助けて天狗を打倒

する存在に仕立てるために、様々な仏教的特徴を表現として与えていることが確認された。特に本話の「竜」が弘法大師が作った「万能ノ池」出身であることは、仏教的な背景を担保し、「小童」の姿を取ることは天狗を打倒するのに決定的な役割を与える表現であると言えよう。

また、本話において重要と思われる「前生ノ機縁」は『今昔』内での他の用法から、竜が僧を助けて天狗を打倒することを仏教的に説明しようとする修辞であると言える。

このように本話は構成と表現の両面から『今昔』の「天狗説話」が仏教説話を集めた仏法部に属するにあたり、意図的な処理が与えられていると評価できる。本来的に仏教世界に属さない「竜」が僧を助け、天狗を倒す主体となるに当たっては、『今昔』は様々な文飾を必要とするのであり、これこそが「天狗説話」の仏教説話としての性質とも言いうる。

「天狗説話」は反仏教的存在を語る説話群として規定されたが、表現面においても仏教説話として成り立たせようとする作為が見られる。本論では巻二十第十一のみを取り上げたが、他の説話についても考察することで、「天狗説話」がいかにして『今昔』の仏教説話としての位置づけを与えられているかが、解明されていくに違いない。

注

- ① 以下、『今昔物語集』を『今昔』と表記する。
- ② なお、「天狗」は、『今昔』中において「天宮」などの表記がされることもあるが、以下「天狗」と総称することにする。
- ③ 森正人『今昔物語集の生成』、二二八頁。
- ④ 以下、本論の中でこの説話を原則的に「本話」と称する。
- ⑤ 以下、『今昔物語集』の本文は『新日本古典文学大系』に基づく。現代語訳・抄訳は『新日本文学大系』の本文に基づいて私に行ったものである。

⑥ 『新編日本古典文学全集 今昔物語集』（第三巻）に「伝承説話」として長く生命を保ったものらしく、同話に取材した作品に中世小説『秋の長物語』がある（一七〇頁）とある。

⑦ 国東文麿『今昔物語集成立考』六〇七頁。

⑧ 国東文麿『今昔物語集成立考』四八〇頁において記された表から私に取り出した。

⑨ 以下、『今昔』の説話名を記す際「巻〇（標題）第〇」あるいは「巻〇第〇」と記す。

⑩ 『今昔』に弘法大師が登場する説話は次の七話である。

- ・ 巻第十一 弘法大師渡唐伝真言教帰来語第九
 - ・ 巻第十一 智證大師渡唐伝顕密法帰来語第十二
 - ・ 巻第十一 弘法大師始建高野山語第二十五
 - ・ 巻第十四 弘法大師挑修円僧都語第四十
 - ・ 巻第十四 弘法大師修請雨経法降雨語第四十一
 - ・ 巻第二十 竜王为天狗秘取語第十一
 - ・ 巻第三十一 讃岐国満濃池頼国司語第二十二
- ⑪ 『今昔』中の蛇が登場する説話は四八話あるが、これを私に分類する

『今昔物語集』天狗説話の仏教性

と、次のようになる。

- ア… 神格や仏の化身としての蛇…一〇例
- イ… 単なる自然生物としての蛇…二二例
- ウ… 仏教の因果応報による悪果としての蛇…一〇例
- エ… 前世としての蛇…三例
- オ… 物が化した蛇…三例